會津八一の戦前蒐集品に関する調査報告（8）
――敦煌塑造浮彫仏像――

下　野　玲　子

はじめに

本稿では會津八一（1881～1956）の戦前蒐集品のうち、敦煌出土の塑造浮彫仏像について報告し、原所在地について若干の考察を試みたい。

本作品は粗雑なつくりの浮彫仏坐像で、昭和11年（1936）の會津八一自筆の蒐集品目録である『古器物目録』第９冊、第10冊に記された「仏像仏具の部」のうち、第９冊第43号の「燉煌壁画佛像」に相当すると結論付けた。ただし、『古器物目録』には「壁画」とあるため、照合作業を開始した当初はすぐに思い当たるものがなかった。會津八一が「壁画」と記した理由は定かでなく、あるいはこの名称のまま売りに出されていた可能性もある。ただ、後述するようにこの作品は壁面に数多く貼り付けられた千仏を構成する一体であったと考えられるため、「壁画」と称したことはまったくの間違いとはいえないであろう。

『古器物目録』第９冊第43号の直前は「唐石佛頭」、その前後には「唐磚仏」や「六朝磚仏」が散見され、第43号には時代が記されていないが、おおよそ六朝から唐代の頃の作品と解して配列したことも想定される[註1]。

１．作品の詳細

本作品の寸法、状態は次の通りである。

名称　如来坐像（**図１、２**）

會津八一コレクション仏像仏具新番号　AY-B-067

材質・技法　塑造、型抜き、彩色

寸法（cm）　縦22.5、横15.3、厚：頭部髪際中央で2.7、身光の縁で0.8～0.9

楕円形の挙心光を備え、台座上に趺座する如来坐像である。頭部にもっとも厚みがあり、頭上に肉髻が盛り上げられ、耳はかろうじて膨らみであらわされるが、腕や膝の盛り上げは薄く、顔面の目・鼻・口は凹凸がほとんどない。後述するような敦煌の類似品から考えて、型抜きで大量生産された、中国で「影塑」とよばれる塑像の一種と考えられる。彩色は、最初に周囲側面に赤色を塗り、その上からおそらく表面全体に白色の下地を塗り、円形の頭光と体部の通肩にまとう衣を赤色に塗り、腹前中央に手先を白く塗り残すことで禅定印をあらわす。その上に、頭髪に薄い黒色を塗っている。身光と台座は白色の下地に青色が所どころ掠れながら残存している。身光の縁は青色が帯状に塗ってあり、台座は上方に沿った位置に青色が薄く残り、その上に青色の丸い点を横並びに３か所置いている。最後に頭光と台座上縁を白線で描き起こしている。身光の左方の縁に白線が所々確認できるため、身光も輪郭を白線で描き起こしていたと推測される。顔面を子細に観察すると、中央近くに両眼の目頭付近の上瞼・下瞼の墨線が一部残っている。また通肩の赤色の衣の上には、さらに濃く暗い赤色で、胸、両腕、膝に太い衣文線を刷いてあるのがうっすらと残っている。襟に当たる部分にも同じ濃色で縁取り線を入れ、その左方で幅を広げるところ

などは通肩の仏像に通例の描き方となっている。髪際線が左右対称でないなど、総じて塗り方は乱雑であるが、衣文線には手慣れた描き方が看取される。

保存状態は、左頬の一部と挙身光や台座下の側面に表面が欠けて土が見える箇所があるが、大きく欠損する部分はない。腹部のやや凹んだ部分に塑土が乾く前にできたと思われる横方向のひび割れがある。保存環境が劣悪だった時期を経ているらしく、表面・裏面とも黒褐色の細かい点状のカビに上半分のかなり多くの部分が覆われている。裏面や側面の破損部を見ると、土の間に植物のスサが混入されているのがわかる。

図１　如来坐像　正面

図２　如来坐像　描き越こし図

２．敦煌莫高窟の千仏図と塑造浮彫千仏

本作品は「燉煌壁画佛像」という『古器物目録』の名称により、石窟内壁面に並べて貼り付けた千仏の一つと推測される。この記録に基づき、類例品と比較しながら敦煌莫高窟における原所在地について若干の考察を試みたい。

美術作品における千仏とは、必ずしも千体の仏を指すとは限らず、一般に同程度の大きさの坐仏を複数、縦横に連続して配列した図像を指している。石質が礫岩で彫刻に適さない莫高窟では千仏は絵画表現が通例で、壁面や窟頂の大半を埋め尽くすように描かれている例がよく見受けられる。しかし、雲岡石窟や龍門石窟などの内壁に仏像を彫刻する石窟では、主尊の仏・弟子・菩薩像と同様に浮彫であらわされている。

莫高窟の千仏図は、現存最古の北涼から北魏、西魏、北周、隋、唐（初唐、盛唐、吐蕃支配期、晩唐）、五代、北宋、西夏、元までの各時代にわたって見られる。梁暁鵬氏の研究によれば、莫高窟で現存する窟の総数735のうち、壁画と塑像の残る窟は実質469あるが、そのうち千仏があることが記録されている窟は334に上るという[註2]。石窟内の絵画主題としては普遍的なものといえる。時代によって様式に細かな差異はあるが、北朝期には挙身光を負い蓮台上に趺坐する仏坐像で、上方に天蓋が付いている。着衣法は両肩に袈裟を巻きつける通肩と、胸元を大きく寛げて左肩から右腋に斜めに着用した内衣を見せる中国式服制（双領下垂式ともいう）の二種に分かれ、末森薫

氏の一連の研究によれば北朝期ではこの二種が左右に交互に配置されるか、通肩のみが連続して配置される[註3]。両手は腹前中央で禅定印を結び、両足は衣に隠れて見えない。各仏像の左上方（向かって右上）には仏の名を記入する縦長の榜題が配されている。多くの榜題はただ白色の長方形が残るのみで文字が見えないが、第254窟では榜題の仏名が書き込まれ、それらは過去荘厳劫千仏と未来星宿劫千仏に相当することが解読されている[註4]（**図３**）。窟内に塑像で安置された釈迦如来像や弥勒菩薩像が現在賢劫千仏に含まれるため、千仏図と塑像を合わせて過去・現在・未来の三世三千仏信仰をあらわしていることになる。三世三千仏は禅僧が観想する主要な対象であることから、石窟内の千仏図は禅観修行を目的として描かれたという見解が主流である[註5]。

また、仏身・衣・頭光・身光・台座の彩色は、あるいは頭光と衣が同色、台座と身光が同色であるなど、二部分が同色である場合もあるが、各部分の配色には規則性があることが指摘されている[註6]。

一方、莫高窟で「影塑」とよばれる、型抜きで半肉彫りに整形された塑像は、北魏から、西魏、北周までの北朝期と次の隋時代の窟に散見され、早期の窟の一部の特徴となっている[註7]。種類としては立仏、化仏、蓮華化生、菩薩、飛天、供養菩薩、そして化仏とは別に千仏があると報告されている[註8]。北魏の第254窟や第257窟など、一般に北朝期の窟形式である中心柱窟（中心塔柱窟）の中心柱の四面に貼り付けられ、仏龕内の主尊である塑造の本尊仏像を脇侍の比丘や菩薩の塑像とともに供養・讃嘆し、荘厳する役割を果たしていると思われる（**図４**）。**表１**は『敦煌莫高窟内容総録』の記録によってそれらの概要をまとめたもので、種類としてもっとも多くの窟に見られるのは第248窟のような供養菩薩像である（**図５**）。

＊著作権保護のため画像を公開できません

図３　莫高窟第254窟北壁　千仏図

＊著作権保護のため画像を公開できません

図４　莫高窟第254窟中心柱東面

＊著作権保護のため画像を公開できません

図５　莫高窟第248窟中心柱東面　供養菩薩

これに対し、複数同形の仏坐像の形式をとる千仏の作例は、管見の限り、北魏または西魏とされる第288窟・北周の第290窟の中心柱と、北周の第428窟主室四壁上層、隋の第302窟・第303窟の須弥山形中心柱に位置する５窟に限られる。このうち第288窟と第428窟は現存作品があるが、それ以外の窟は剥がれた痕跡が残っているだけで、壁画の千仏図によく見られたように個々の仏坐像の左上方に長方形の榜題が白く残っていることで、菩薩等ではなく千仏であったと判別できる程度であり、その詳細な形状は窺い知ることができない[註9]。

第288窟中心柱には、正面である東面には12体、南面に２体、西面に1体が残存する[註10]。比較的残り具合のよい東面では、元来は縦に四列、横に最大11体が並んでいた跡があり、比較的連続して残存している１～２段目で見ると、通肩と中国式服制の像が交互に置かれ、配色は4種類が一組で横に並んでいる（**図６**）。その彩色は変色していると思われるが、現状では向かって左から、①中国式服制：黒褐色の衣と頭光、青色と緑色の身光と台座、②通肩：青灰色（もしくは淡青色に青色の衣文）の衣、緑色の頭光、黒褐色の身光と台座、③中国式服制：黒褐色の衣、白色の頭光、灰色の身光、緑色と青色の台座、④通肩：緑色の衣、灰色の頭光、白色の身光、黒褐色の台座、という４種類である。この配色は一段上では向かって左に一体ずつずれて配置される。黒褐色は鉛丹などの鉛系顔料が変色した可能性があるため赤系統の色であったことが想定されるが、そうだとしても會津八一コレクションの一作品とは配色・着衣法が一致するものはない。また凹凸も腕、衣の縁などが明瞭に浮き出され、左右に張り出す膝頭が鋭角に尖っているのもコレクションとは異なる点である。

表１　莫高窟北朝期から隋代までの型抜きの浮彫塑像（影塑）

窟番号	窟内位置	時　代	影塑種類	現存の有無
248 窟	中心柱四面	北魏（～西魏）	供養菩薩	残存
251 窟	中心柱四面	北魏	供養菩薩	残存
254 窟	中心柱四面	北魏	供養菩薩	残存
257 窟	中心柱四面	北魏	供養菩薩	残存
259 窟	西壁塔形正面・両側面上部	北魏	供養菩薩	北側面に２体
260 窟	中心柱四面	北魏	供養菩薩、化生	残存
288 窟	中心柱四面か	北魏または西魏	千仏	残存
290 窟	中心柱四面か	北周	千仏	なし
428 窟	主室四壁上部	北周	千仏	残存
432 窟	中心柱四面	西魏または北周	供養菩薩、化生	残存
435 窟	中心柱四面か	北魏（～西魏）	化仏、菩薩、飛天、供養菩薩	残存
437 窟	中心柱東面のみ？	北魏	立仏、菩薩、飛天、供養菩薩	残存
302 窟	須弥山形中心柱側面	隋	千仏	なし
303 窟	須弥山形中心柱側面	隋	千仏	なし

＊著作権保護のため画像を公開できません

図６　莫高窟第288窟中心柱東面　千仏

＊著作権保護のため画像を公開できません

図７　莫高窟第428窟

つぎに、北周の第428窟は、北朝期40窟の中で最大規模を誇る中心柱窟で、北周の建平公が造営した一大窟に当たると推測されている[註11]（**図７**）。主室の大きさは南壁・北壁の奥行きがいずれも13.7m、奥の西壁の幅が10.95mで、中心柱は一辺が5.5～5.95mもある[註12]。千仏の塑像は主室の東西南北の四壁上層に縦５列に繞らされており、千仏図を描く代わりに塑像を貼り付けたかたちである。他の窟の型抜き浮彫塑像は中心柱の壁面に貼り付けられているが、この窟の中心柱には龕の内外に大型の塑像が安置されるが浮彫小像は貼り付けられていない。柱の壁面上方に小孔が点々と開いているが、間隔が一定していないため、供養菩薩や千仏の類ではない、何らかの装飾が取り付けられていたのであろう。四壁の千仏の数は一窟に取り付けられた浮彫塑像の数としては最多の1,485体に及んでいた[註13]。もっとも、1,485体は元来の総数であり、現在は最下列に残存するものはわずかで、東壁や南壁では下から２列目も少なく、壁に塗られた下地の黄土色が見えている。

北朝期莫高窟の千仏の配色については、末森氏によれば同じ配色の坐仏が斜めに連続して配置されることにより、壁面に斜めへの方向性（斜行方向）を示しており、斜行方向には（１）壁面に向かって左下から右上に同じ配色の図像が連続するものと、（２）同じく左上から右下に同じ配色の図像が連続するもの、の二種類があるという。さらに、それらの規則性を備えた千仏は、隣り合う図像の頭光および身光の配色関係に使い分けが認められ、①隣り合う図像の頭光と身光の配色が一方向に連続するものと、②交差するものの二種類がある。第428窟の場合、着衣法はすべて通肩で、四体一組の配色で構成されている。斜行方向は上記（１）の左下から右上に同じ配色の図像が連続することで四壁とも共通しているが、隣り合う図像の頭光と身光の配色は壁面によって異なり、南壁では一方向に連続しているが（**図８**）、東壁・北壁（**図９**）・西壁では交差する配置となっていて、窟内四壁を統一する意識は低いという[註14]。

＊著作権保護のため画像を公開できません

図８　莫高窟第428窟南壁　千仏

＊著作権保護のため画像を公開できません

図９　莫高窟第428窟北壁　千仏

表２　莫高窟第428窟千仏の四体一組の配色パターン（現状）

		衣	頭光	身光	台座	その他特徴
東壁	①	赤色	暗赤色	青色	青色	・衣に同色系統の濃色で衣文を描く。
	②	青色	緑色	赤色	暗赤色	・襟と袖口を細い白線で描き起こす。
	③	暗赤色	赤色	緑色	青色	・濃色で喉に〒型の線、台座に三点を入れる。
	④	緑色	青色	暗赤色	暗赤色	・口に色が残るものがある。
南壁	①	赤色	黒色	青色	青色	・衣に同色系統の濃色で衣文を描く。
	②	青色	緑色	黒色	黒色	・襟と袖口を細い白線で描き起こす。
	③	黒色	赤色	緑色	青色	・濃色で喉に〒型の線、台座に三点を入れる。
	④	緑色	青色	赤色	黒色	・眼に白色が残るものがある。
西壁	①	赤色	暗赤色	青色	青色	
	②	青色	緑色	赤色	暗赤色	・衣に同色系統の濃色で衣文を描く。
	③	暗赤色	赤色	緑色	青色	・身光・頭光・台座上縁の白線が残っているものがある。
	④	緑色	青色	暗赤色	暗赤色	
北壁	①	赤色	暗赤色	青色	青色	・衣に同色系統の濃色で衣文を描く（東側はあまり目立たない）。
	②	青色	緑色か	赤色	暗赤色	・身光・頭光・台座上縁の白線が比較的明瞭。
	③	暗赤色	赤色	緑色か	青色	・眼に白色が残るものがある。
	④	緑色か	青色	暗赤色	暗赤色	

さらに、各壁の四対一組の彩色法を衣が赤色の仏を起点として向かって左から①②③④として見てみると、**表２**のようになる。四壁ともに現状の見た目で判断すると、衣、頭光、身光、台座については、基本的に赤色、青色、暗赤色、緑色の四色が用いられていたと推定される。暗赤色が黒色に変わりつつある箇所から判断して、黒色に見える部分はおそらく暗赤色と元は同じ色であったと考えられ、緑色は北壁の一部では黒っぽく、逆に入口に近い東側などでは白っぽく変化しているように見える。また、頭髪を黒く、白毫を彩色であらわし、眼を墨描きするなどの細部が残存するものもある。東壁と南壁の多くには喉の部分に肉身のくびれをあらわす〒型の描線、および衣の襟と袖口に当たる部分に白線が入れられているが、西壁、北壁にはそれらの線はほとんど見えない。

３．會津コレクションとその類例品の原所在地

さて、會津八一コレクションの仏坐像の全体の輪郭、厚みなどは第428窟の千仏ときわめてよく似ている。彩色をもう一度振り返ってみると、衣と頭光は赤色、身光と台座は青色が残っていた。また、身光や頭光の縁に白線で描き起こしが残存するが、襟や袖口には白線は確認できず、喉に〒型の線も見えない。これらを総合すると、本作品は莫高窟第428窟の**表２**①の配色の千仏の一つであった可能性が高く、ことに東壁や南壁よりも西壁か北壁の彩色の残存具合に近いと思われる。側面は赤色に彩色されているが、第428窟の千仏も側面は壁面と同じ赤色になっている。順序としてはおそらく彩色前の塑像を壁面に貼り付けてから壁全体を赤く塗り、その時塑像の側面も同じ色で塗って、さらに一定の規則に従って千仏の衣や身光、頭光などを塗っていったのではないかと想像される。ただ、第428窟の千仏は寸法が公開されていないため、大きさの比較は課題として残る。また、肉身部の色が第428窟の千仏より白すぎる嫌いがあることも疑問ではある。

ところで、1907年から翌年にかけて莫高窟を訪れたフランスのペリオ探険隊が撮影した写真で第428窟を見ると、東壁や南壁では現状より多くの作品が残っていたことがわかる（**図10**）。1900年に莫高窟で王圓籙道士によって蔵経洞が発見されてから100年以上経つが、石窟が保護されるようになるまでの間に相当数が人為的に剥がされて流出したようである。例えば、イギリスから中央アジア探検隊長として敦煌を訪れたオーレル・スタインの報告書 Innermost Asia には、スタインが二度目（1914年）に莫高窟を訪れた時王道士から贈られた塑像として、きわめて本作品と類似する仏坐像が掲載されている[註15]。写真が掲載されているのはスタイン番号 Ch.021（**図11**）お

＊著作権保護のため画像を公開できません

図10　莫高窟第428窟南壁千仏（ペリオ探険隊写真）

図11　スタイン番号Ch.021千仏

図12　スタイン番号Ch.029千仏

よび029（**図12**）のみであるが、解説ではこの２作品とともにCh. 018、019、030をひとまとめに仏坐像として紹介しており、いずれも縦23cm弱、横16cm弱であるという。寸法は會津八一コレクションとほぼ同寸だが、彩色については詳しく述べていない。スタインによれば、これらは彼の最初の敦煌訪問（1907年）の後、王道士からある石窟を掃除していて砂の中から発見したと聞かされたが、スタインは「中央近くの最上層に属する大きな窟の壁に見たような装飾ストゥッコの壁」から取り外してきたものではないかと疑っている。第428窟の莫高窟南区における

位置と大型窟であることから、スタインの言及する窟は第428窟と想定される。

このうち、Ch.021、029、018 については、現在インドのニューデリー国立博物館の所蔵品となっている[註16]。Ch.029 と Ch.018は會津コレクションや第428窟の千仏と同系統の作品である。実見したところ、いずれも通肩の衣、眉・眼・口の線と白毫、喉の〒型の描線、襟と袖口、および頭光・身光・台座上縁の白線の描き起こしが明瞭に残り、保存状態はきわめて良好である。

Ch.029 は衣が青色、衣文線は太く濃い青で描かれる。頭光は赤色の上に青色、身光の縁と台座には赤色の上に黒褐色を呈する彩色が施されている。顔などの肌は青灰色を呈し、喉に〒型の赤い描線がある。眉と眼は墨線で描かれ、白毫と口が赤で点じられる。頭光は青色に見えたが、配色からは表２の各壁の②にほぼ一致する。

Ch.018 は衣が暗赤色、頭光が赤色、身光が暗青色（縁の下層に青色が見える）、台座が青色に見えた。左眼の墨線と白毫、口、喉の〒型描線の赤い彩色が残っている。肌は Ch.029 と同じく青灰色を呈している。側面は赤色に塗られている。身光が緑より暗い青色に見えたが、彩色、描線の特徴からは表２の③に該当するといえる[註17]。

Ch.021 の方は、胸元を大きく寛げて衣を着用する服制で、耳の出や鋭角的な膝の張りなどから図６に掲げた第288窟中心柱に残る千仏とほぼ一致する。會津コレクションや Ch.018、029 などが頭部以外わずかな肉付けしかなされていないのに対し、こちらは瞼や鼻の膨らみ、腕と膝、衣の襞の凹凸が明瞭につくられ、台座には蓮弁の輪郭線も刻まれている。衣と頭光は同じ暗赤色を呈し、胸元の斜めの内衣は灰色、身光の縁と台座は明るい緑色、身光の内側は明るい青色である。第288窟の千仏の配色にも、衣と頭光は黒変しているが、同じパターンのものが残っている（56頁①）。顔面が灰色に汚れたようになっている点もよく似ている。したがって、Ch.021 は第288窟の千仏であった可能性が高いと考えられる。縦23.7㎝、横15.5㎝で會津コレクションと寸法は近い。

また、1944年に矢代幸雄氏が紹介した京都個人蔵の「燉煌出土塑造半肉仏像」５点のうち、少なくとも後の２点は會津八一コレクションに近似する。１点は縦20㎝ほど、２点目は22㎝弱で、會津コレクションよりわずかに小さいが、これらももと第428窟の千仏であった可能性が考えられる[註18]。

その他にも敦煌莫高窟内から剥離された塑造千仏像が多数存在することは想像に難くない。引き続き、調査を続けてゆきたい。

註

⑴ 『古器物目録』第９冊第43号の直前は唐石仏頭だが、その前は唐磚仏が４点連続し、43号の後は唐磚仏２点、六朝磚仏、唐佛像、六朝小佛像２点と続く。

⑵ 梁暁鵬『敦煌莫高窟千仏図像研究』民族出版社、2006年、１～２頁。なお、『敦煌莫高窟内容総録』は敦煌文物研究所編で文物出版社と平凡社から1982年に出版されたが、その後修正版が1993年に敦煌研究院編『敦煌石窟内容総録』として文物出版社から刊行された。

⑶ 末森薫①「敦煌莫高窟早期窟千仏図の規則的描写法：第二五四窟の空間設計における千仏図の機能」『仏教芸術』347、2016年７月、９～37頁。同②「敦煌莫高窟北朝前期における石窟造営の展開：千仏図の描写設計を中心として」『中国考古学』16、2016年11月、279～301頁。同③「敦煌莫高窟の西魏代における石窟空間構成：千仏図の描写設計を中心として」『国立民族学博物館研究報告』41（2）、2017年４月、127～193頁。同④「敦煌莫高窟の北周代における石窟空間構成－図案が示す方向性による解釈－」『世界遺産学研究』4、2017年８月、32～62頁。

⑷ 寧強・胡同慶「敦煌莫高窟第二五四窟千仏画研究」『敦煌研究』1986年代4期。

⑸ 賀世哲「関於北朝石窟千仏図像」『敦煌研究』1989年第三期・第四期、張元林（濱田瑞美訳）「インド、中国芸術の融合」（『敦煌石窟１莫高窟第二五四窟・第二六〇窟』文化学園・文化出版局、2002年、36～38頁。原書『中国石窟芸術・莫高窟第254窟附第260窟』江蘇美術出版社、1995年）、濱田瑞美「敦煌莫高窟の白衣仏」（『中国石窟美術の研究』

中央公論美術出版、2012年、49～82頁）など。

⑹　註３末森論文による。

⑺　影塑という用語は古くからあったわけではなく、齋藤龍一氏によれば1951年の閻文儒氏の論考で壁面に貼り付けられる型を用いた千仏と捉える定義が示されて以後、現在もその意味が踏襲され、日本では50年代中頃から用いられるようになったという。齋藤龍一「学術用語としての「影塑」について」『敦煌・絲綢之路（シルクロード）国際学術研討会議論文集』神戸大学大学院人文学研究科（美術史学百橋研究室）、2013年、269～280頁。しかし、齋藤氏が指摘するように、「「影」と型を用いる技法との間には何ら意味上の繋がりを見いだせない」。

⑻　前掲註２『敦煌莫高窟内容総録』による。

⑼　第290窟についてはフランスのペリオ探険隊の撮影写真（1907～08年）に、中心柱東面の龕上部に残っている千仏があるように見えるが、きわめて不鮮明である（Paul Pelliot, Les grottes de Touen-Houang : peintures et sculptures bouddhiques des époques des Wei, des T'ang et des Song, Vol.5, PL.CCLXXI.）。また、同じペリオ探険隊写真に第302窟の須弥山形中心柱の一部が見える１枚があるが、映っている範囲では千仏は１つも残っていない（Vol.5, PL.CCXCV）。

⑽　『敦煌莫高窟内容総録』81頁による。

⑾　施萍婷「建平公與莫高窟」（『敦煌研究文集』甘粛人民出版社、1982年）、同「関于莫高窟第四二八窟的思考」『敦煌研究』1998年第１期。その他は賀世哲・施萍婷（萩原哉訳）「莫高窟第428窟の研究――近く中原に接し、遠く西域に接する――」（『敦煌石窟３莫高窟第四二八窟』文化学園・文化出版局、2002年、41頁。原著『敦煌石窟芸術・莫高窟第428窟』江蘇美術出版社、1998年）を参照のこと。

⑿　石璋如『莫高窟形』中央研究院歴史語言研究所、1996年、一、409～410頁、二、138頁による。

⒀　前掲註11賀世哲・施萍婷論文30頁。

⒁　註３末森論文④による。

⒂　Sir Aurel Stein, Innermost Asia : detailed report of explorations in Central Asia, Kan-su and eastern Iran, carried out and described under the orders of H.M. Indian government, 4 vols, Oxford : Clarendon Press, 1928, Vol.1, p.359, 361, Vol.3, Plate XLIX.

⒃　Ch.021、029、018については、幸いに2018年２月８日～９日にインド、ニューデリー国立博物館において調査・閲覧することができた。ただし、Ch.021 と 029 は展示壁に嵌め込まれガラスケースに覆われているため、寸法の計測と側面・裏面の観測はできなかった。

⒄　Ch.018については公開データベースで写真を閲覧することができる。
http://museumsofindia.gov.in/repository/museum/nat_del（2018年１月10日閲覧）

⒅　矢代幸雄「燉煌出土塑造半肉仏像」『美術研究』135（13-2）、1944年３月、26～34頁。この論考の存在は森美智代氏にご教示いただいた。なお、２点のうち前者は衣文線が濃青色、身光が暗赤色と記録されていることから、強いて挙げれば第428窟の②の配色に相当する。後者は衣が赤みを帯びた灰色と記録されているが、頭光と身光、台座の彩色は説明されておらず、第428窟の①か③か判別できない。これらの塑像については松本榮一氏も言及している。松本榮一「「かた」による造像」『美術研究』156、1950年11月、１～15頁。

【図版出典】

図１　筆者撮影
図２　筆者作図
図３　『敦煌石窟1莫高窟第二五四窟・第二六〇窟』文化学園・文化出版局、2002年、図88
図４　敦煌研究院主編『敦煌石窟全集３本生因縁故事画巻』商務印書館、2000年、図13
図５　敦煌研究院主編『敦煌石窟全集8塑像巻』商務印書館、2003年、図20
図６　敦煌文物研究所編『中国石窟：敦煌莫高窟』１、平凡社・文物出版社、図110
図７　敦煌研究院主編『敦煌石窟全集22石窟建築巻』商務印書館、2003年、図33
図８　『敦煌石窟３莫高窟第四二八窟』文化学園・文化出版局、2002年、図６より
図９　『敦煌石窟３莫高窟第四二八窟』文化学園・文化出版局、2002年、図76より
図10　Paul Pelliot, Les grottes de Touen-Houang, Vol.5, PL.CCLXXXI.
図11、12　Sir Aurel Stein, Innermost Asia, Vol.3, Plate XLIXより